

『続・がん医療におけるコミュニケーション・スキル 実践に学ぶ悪い知らせの伝え方』

わかちあうことで インフォームド・コンセントを めざす「SHARE」を

編集：藤森麻衣子・内富庸介／定価：2,940 円(本体 2,800 円+税 5%)

発行：医学書院／TEL：03-3817-5657



本書は、前編同様、がん医療のみならず、いずれの医療現場においても求められる普遍的なコミュニケーションのあり方を示したものである。冒頭では、こんな一節が述べられている。「インフォームド・コンセントの和訳『説明と同意』という言葉からは人の心である知・情・意の『情』がすっぱりと抜け落ちている。(中略)本来、患者の感情を理解することもインフォームド・コンセントには含まれているはずである。」すでに医療現場に浸透している「インフォームド・コンセント」が適切になされていないという声をしばしば耳にする。実際、病状と治療方法の説明を受けて、自ら治療方針を自己決定できる患者は少ないという。この背景には、日本人の文化的背景やパターナリズムに影響されて生まれた「おまかせ式医療」の根深い存在が垣間見える。とりわけ、“悪い知らせ”つまりがんという病気がもたらすイメージとその現実、患者・医療従事者双方とも希望を失わせ、インフォームド・コンセントの成立をいっそう困難にする。

本書では、Supportive environment(支持的な環境)、How to deliver the bad news(悪い知らせの伝え方)、Additional information(付加的な情報)、Reassurance and Emotional support(安心感と情緒的サポート)の4要素からなるSHAREの概念に基づき、さまざまな事例とシナリオが提示され

ている。悪い知らせを伝える際は、衝撃を緩和するための心の準備を患者に促すこと、わかりやすく明確に伝え、かつ、侵襲的ながんという言葉の繰り返さないこと等が具体的な会話や態度とともにわかりやすく説明されている。

人が他者にむけて発する言葉は、自らにとってのメッセージともなり、行動を促す作用をもつ。相手をいたわる言葉、共感する言葉、支えようとする言葉を発することによって、それを全うしようとする行動を引き起こすのである。医療従事者が、治す側から共に歩む側へという立場の変換をするためには、自らが発する言葉のもつ力を認識し、意図的に用いることも必要であろう。「Share」という言葉には“わかちあう”という意味が含まれている。がん患者・家族と医療従事者が病という体験と、そこに生じる感情をわかちあうことができれば、患者の残された生活には希望が見えるはずである。もし私たちが、ここに書かれた言葉や態度をそのまま実践するならば、本書はただのマニュアルテキストとなり、その価値を失ってしまうだろう。本書を手にとられる方々が、ここで得たヒントを、患者に相応しく自分らしい形にアレンジして実践することによって、著者らがSHAREの概念に込めた思いが、本来あるべき姿のインフォームド・コンセントの実現につながることを願う。